

(3) べからず

自分のできることを見極め、例え被災者に頼まれても、自分や周囲を危険に巻き込むような仕事は引き受けないようにしましょう。

防災ボランティアは、被災者の立場をできるだけ理解し、自分の判断を押しつけるようなことを避けましょう。

ボランティアは非日常的な活動ですが、被災地／被災者は早期に日常生活を取り戻すことがもとめられます。その日の振り返りの意見交換が深夜に及んで周囲に迷惑をかけたり、高揚した気持ちを押さえるための適量のアルコールが過剰になるようなことがないようにしましょう。

日常のボランティア活動に比べて、よりリスクが高いのが災害ボランティアの活動です。自らのケガだけでなく、心ならずも被災地や被災者、他のボランティアに損害を与えてしまうことをできるだけカバーするために、自らボランティア保険に入りましょう。

必要以上に自分の経験を振りかざすことは避けましょう。

について

「防災ボランティア」の言葉については既にご書いたとおりです。単に「べからず」としましょう。ここでの表現方法は、「○○してはいけない」という書き方をせずに「let's」の表現にしませんか。実は、そうなると、きはんとべからずの違いがうすくなりますが、「してはいけない」という表現は、思考停止を招く恐れがあります。自発的に判断が出来る人的資源を育てましょう。＜中川氏（時事通信社）＞

について

災害時に限ったことではないです。もうちょっと災害に即していけば、次のような言い方でしょうか。「災害時には、『どちらの判断も正しい』ということがたくさんあることをよく理解しておこう」とか「...良く理解し、自分の判断を押しつけるようなことを避けよう。」＜中川氏（時事通信社）＞

について

議論がありましたが、「夜遅くまで騒ぐ」ということと、「酒を飲む」ということがごっちゃに見えます。また「デブリーフィング」が「騒ぐ」と受け止められる可能性もあります。「ボランティアは非日常的な活動ですが、被災地／被災者は早期に日常生活を取り戻すことがもとめられます（編注：これは「きはん」でしょうか。その日の振り返りの意見交換が深夜に及んで周囲に迷惑をかけたり、高揚した気持ちを押さえるための適量のアルコールが過剰になるようなことがないようにしよう。」なんていうことでしょうか。マナーはこれだけじゃあないですし、「くふう」によって、マナーをより守っているように感じさせることも出来ます。例えば、「避難所にいる人と話をする際には、相手と同じ目線に自らの姿勢を自然に合わせて話をしましょう」なんていうことも、やってもらっているというストレスを与えますよね。＜中川氏（時事通信社）＞

について

「日常のボランティア活動に比べて、よりリスクが高いのが災害ボランティアの活動です。自

らのケガだけでなく、心ならずも被災地や被災者、他のボランティアに損害を与えてしまうことをできるだけカバーするために、自らボランティア保険に入りましょう。」＜中川氏（時事通信社）＞

（その他）

「必要以上に自分の経験を振りかざすことは避けましょう。」＜栗田氏（レスキューストックヤード）＞

4）その他

「規範」という用語には、お硬いという語感なのでやや抵抗があります。
対案として、「心得（こころえ）」を提案します。（漢字、ひらがな表記は、どちらでもお任せします。）前文の文章内の「こころがまえ」や「こころがけ」を、「心得」だけにし、1．防災ボランティアの「規範」を1．防災ボランティアの「心得」にした方がやわらかい語感になると思います。また副案として「最低限のルール」又は「最低限のマナー」、もっとくだけて「おきまり」または「たしなみ」があります。＜弘中氏（NPO 法人防災ネットワークうべ）＞

[規範]という言葉に代わる良いフレーズはないでしょうか？＜秦氏（JFFW）＞

仮にもガイドを作ろうというのであれば、試行錯誤しつつ、事務局案としてその体系を考え（例1：大項目・中項目・小項目、例2：10時間経過時点での対応、100時間経過時点での対応、1000時間経過時点での対応）、それを提示した上で、メンバーの経験に照らして足りない部分や修正すべき部分を聞くべきです。＜小村氏（富士常葉大学）＞

語尾が1では、「しよう」という呼びかけになっているが、2、3ではである体になっていて統一されていない。原則、呼びかけに統一し、説明文はである体にするのではどうか。内容が項目の羅列でちょっと物足りない。抽象度の高いものと具体的なものが混在して、レベルが不統一で読みにくい。中項目で抽象的な中括り、小項目で細目をあげると深さが出てくる。少人数のたたき台作成チームで2回程度議論してはどうか。＜鍵屋氏（板橋区福祉事務所長）＞

物理的な会合の場以外で検討を行うのであれば、メーリングリストを開いて下さい。その ml の運営の方法も考える必要があるでしょう。この場合、できるだけ管理者＝司会者の負担にならないようにする必要があります。

メーリングリストの活用法の案です

1：検討委内でおさほう集 ml に参加するかどうかが募り、希望者参加とする。参加しない人は、おさほう集の中身に関して、検討会メンバーとして特にコメントがないと判断する。意見を出すことが目的ではなく、なんらかの成果物をまとめることを目的とする。

2：全体の ml と分科会的に「きはん」、「くふう」、「べからず」の3つの ml を設ける。分科会と同

様にどこか一つにしか入れないことにする。識者は希望をとって手分けして入ってもらう。

3：最初から、時限的に議論を進める。最終成果物（公開用第1次まとめ）を例えば3カ月後に置くのであれば、最初の1カ月は、原案へのコメントを出し、不足点を補い、検討会メンバー同士で議論を行っておきます。ここは議論を膨らます段階。

4：識者は特に議論に参加しなくても良いですが、事務局でウオッチしておき、発言のないメンバーに発言を促したりする。

5：1カ月でいったん、小休止して ml 投稿は出来ないようにする（メールは管理者にしか届かないようにする）。小休止後、1週間で論点のまとめペーパーを事務局で作って参加者に確認をする。それに基づいて1カ月で事務局が修正案をまとめる。事務局と共に、修正案をまとめる起草者も検討委メンバーに公募します。なお、これは自分の意見を盛り込むためではなく、メンバーの意見がうまく盛り込まれるための裏方としての作業・働きであり、自分の意見を押しつけないニュートラルな作業員として参加、このための ml を作る。この修正案は、最終案 に向けてのたたき台になるもので、まとめの段階では、各分科会に参加した識者に意見も事前に求めておき、修正案には識者のコメントも付与します。

6：再び分科会の ml をオープンにする。さらに半月ぐらい、修正案に対してのコメントを求めます。再開時に、修正案は検討委全員に送り、分科会の変更も可能とするが、議論の蒸し返しにならないよう、検討済みのことについては整理しておく。この半月は、合意形成、議論の集約の時間です。議論が分かれると想定されるところは、事務局案の段階で両論併記するような表現を考えておきます。

7：この議論を踏まえ、第1次公開案は、事務局と識者で1週間程度の間にまとめ、分科会 ml で最終的にチェックをし、両論併記的な書き方でも納得がいけないケースがあれば、検討委メンバーが名前を出した上で、一定の制限文字数で「コメント」として残すことを認める。

8：3カ月で第1次案が完成。パブコメを求める。直近の被災地だけでなく、過去の被災地のボランティア関係者に配布してコメントを求める。パブコメやコメントはおさほう集 ml に戻す。検討委以外の希望者も入れる公開おさほう集 ml も作る。（負担が大きいので、ここは無理に世話係を設けない？ 場は作るが、使う人の自由でということにする？）

9：検討委のおさほう集 ml は、常時開設すると負担が大きいので、意見交換をするときだけオープンにする。

10：おさほう集の修正は、年1回、定期的に行う。その前に、その1年間のボラセンにコメントを求める。また、過去のボラセンで、おさほう集の修正作業に協力してもいいというところを登録してもらい、そこにもコメントを求める。これは、時間経過によって、評価が変わってくる可能性があるからである。

11：特に大きなテーマが予想されなければ、1 - 2カ月の作業とする。まず、この1年間の課題を出し合い、事務局と起草者、識者が半月程度で修正案をまとめ、最終的な意見交換をして、オープンにする。こんなことの繰り返しでしょうか？

このおさほう集は、一方的に事務局の責任でまとめて出すようなものではないと考えます。このメールでの意見聴取の結果として、外部に出すとすれば、それは検討会で引き続き意見交換中であるとか、また各項目に対する検討会メンバーのコメントを付けて公開することを求めます。私は、自分の名前を付けてのコメントで問題はありません。これを「内閣府」が出すのか、検討会事務局なのかですが、いずれにしろ、チェックをした検討会メンバーは共同責任を負わざるを得ないので、すから、「検討会」という公表の仕方もあると思います。

それと、まず、誰を対象にしたものなのかが、よく分からないですね。個人ボランティアなのか、現場リーダーなのか、ボラセンスタッフなのか、ボラセンコーディネーターなのか、ボラセンマネージャーなのか、広域支援コーディネーターなのかも。また、災害時のボランティア活動に限ったことなのか、一般的なボランティア活動の時のあり方なのかも、未整理のゴっちゃゴちゃレベルですね。これまで、検討会では詳細に議論をしていませんから。素直に「いいこと」をしようとするのは、気持ちがあっても少し勇気がいります。それが、このおさほう集の言葉遣い一つでその勇気をスポイルしてはならないはずです。できるだけ多くの皆さんに活動してもらおうということが求められているはずなのに、逆になるようではまずいですから、丁寧にまとめることがとても重要だと考えます。

ただ、どんどん増やすものなのか、常識的な項目数で治めることを前提にするのかを考える必要があるでしょう。「くふう」は増えてしまいましたが、「きはん」や「べからず」=私は個人的にいずれもおなじものだと思いますが=は、カブスカウトの2つの約束と5つのさだめ、ボーイスカウトの3つのちかい8つのおきてぐらいに絞り込むことを前提にしてもいいと思います。これも考え方になります。

まず、タイトルですが、「防災ボランティア」なのか「災害ボランティア」なのか、です。私は「べからず集」という言葉に反論していたので、全体が「お作法集」となるのは賛同しました。ただ、「防災ボランティア」の活動になると、平時の地域の減災活動なども含まれてきます。そこは規範などというものではなく、多様な活動があればいいので、タイトルは「被災地でのボランティア活動、お作法集」とすべきだと思います。本文中の「防災ボランティア」は、すべて「被災地でのボランティア活動」とするのがよいです。＜中川氏（時事通信社）＞